

*Synthetic Chemistry of Fine Particles, 2015*

# 微粒子合成化学・講義

<http://res.tagen.tohoku.ac.jp/mura/kogi/>

E-mail: [mura@tagen.tohoku.ac.jp](mailto:mura@tagen.tohoku.ac.jp)

多元物質科学研究所 村松淳司

# この講義目的

- ▶ 微粒子の合成に関する物理化学的知識を身につけること。
- ▶ 身の回りの表面科学・界面化学に関する現象を物理化学で考えること。
- ▶ コロイドの分散凝集等の界面化学や、吸着・表面反応等触媒反応の知識を取得することを目的とする。

# 講義概要

- ▶ 微粒子合成研究にとって基盤知識となる、表面や界面における物理化学を講義する。
- ▶ また、コロイド粒子の分散・凝集について、DLVO理論を元に考察する。一方、固体表面の物理現象、吸着、表面反応についても理解を深める。

# 目標

- ▶ (1) 主に水溶液からの微粒子生成機構に関する物理化学的知識を得ること
- ▶ (2) 身の回りの表面科学・界面化学に関する現象が物理化学で説明できることを理解すること
- ▶ (3) ナノ粒子触媒の作用機構を理解すること
- ▶ (4) それらの現象を物理化学で説明できることを理解すること

# 講義の進め方

- ▶ 物理化学とはなんぞや
- ▶ 身の回りのコロイド現象から入ろう
- ▶ 微粒子とコロイドについて、物理化学をベースに考えよう

# 基礎知識

# 物理化学 physical chemistry

## ▶ Physical (形容詞)

- 【1】物質の、物質的な、物質界の、自然の、自然界の、有形の、実際のな、実際の、天然の
- 【2】身体の、肉体の、身体的な、人的な
- 【3】相手の体を求めたがる、好色な
- 【4】物理学の、物理学上の、物理的な
- 【5】自然の法則による、自然科学の

# 物理化学とは

- ▶ 物質の動きをとらえる化学
- ▶ 平衡論と速度論の世界へ

# 平衡論と速度論

- ▶ 平衡論は、いわば、桃源郷ユートピアの世界の話である。この世界と今とのエネルギー差が、まさしく、ギブスの自由エネルギー変化なのである。平衡論は、エネルギー的に最も安定なところは、どこか、「ある条件下」で、規定しようとする学問である。理想と現実の間の、今、どこに位置しているか、それを数値解析するのが平衡論である。

# 平衡論と速度論

- ▶ 速度論は、桃源郷に如何にたどりつくか、というガンバリ度を表している。詳しくは、講義の後半で話していく。簡単にまとめると、
- ▶ 物理化学とは物質の動きを数式化し、理解すること。

# 平衡論と速度論

## ▶ 平衡論と速度論

- 平衡においては、正方向と逆方向の速度が等しい
- 平衡に達するまでの速度
- 不可逆過程と可逆過程

# 化学ポテンシャル

- ▶ 系全体のギブスの自由エネルギー変化に及ぼす、個々の成分のエネルギー変化の寄与分をさしている。式的に表すと、
- ▶  $G = f(T, P, V, n_1, n_2, n_3 \dots)$
- ▶ で  $V$ 一定で、全微分すると、
- ▶  $dG = (\partial G / \partial T) dT + (\partial G / \partial P) dP + \sum (\partial G / \partial n_i) dn_i$

# 化学ポテンシャル

- ▶  $T, P, n_j$ が一定の時の、 $(\partial G / \partial n_i) = \mu$ を成分*i*の化学ポテンシャルという。
- ▶ ある成分のガンバリ度を示している、と考えても良いだろう。

# 1モルの定義とは

- ▶ かつて1970年代までは、 $^{12}\text{C}$ が、 $0^\circ\text{C}$ , 1 atmで12gあるとき、1 molという、とかが定義だったが、計測法の進歩とともに、電子の質量など不確定性要因が無視できなくなり、定義を変更する。
- ▶ 「0.012キログラムの炭素12の中に存在する原子の数と等しい数の要素粒子を含む系の物質質量」
- ▶ ちょっと前の定義は下
- ▶ 「0.012キログラムの炭素12の中に存在する原子の数と等しい数の要素粒子又は要素粒子の集合体(組成が明確にされたものに限る)で構成された系の物質質量」

# 1モルの定義とは

- ▶  $n(X)\text{mol} = N(X) / N_a$  [X要素粒子、 $N$ は数]
- ▶ 結局、原子が、 $N_a$ (アボガドロ数)個集まったとき、1 mol原子などと呼ぶ」ということになっており、肝心のアボガドロ定数は、  
6.022 141 29 × 10<sup>23</sup> 個 / mol  
である。上記は2010年以降使用している数値
- ▶ つまり、定義に入っている、アボガドロ数も経時変化する、という変な定義なのである。
- ▶ [http://physics.nist.gov/cgi-bin/cuu/Value?na|search\\_for=Avogadro](http://physics.nist.gov/cgi-bin/cuu/Value?na|search_for=Avogadro)

# pHの定義とは

$$pH = -\log_{10} a_{\text{H}}$$

- ▶ ガラス電極法によるpH測定での拡張不確かさ $U(k=2)$  は、 $0.025 \sim 0.030$
- ▶ pH一次標準液を用い、この標準液と同一組成と見なせる場合は $\sim 0.01$ ;
- ▶ Differential - potentiometric cell を用いた場合の拡張不確かさは $\sim 0.004$

# 活量とは

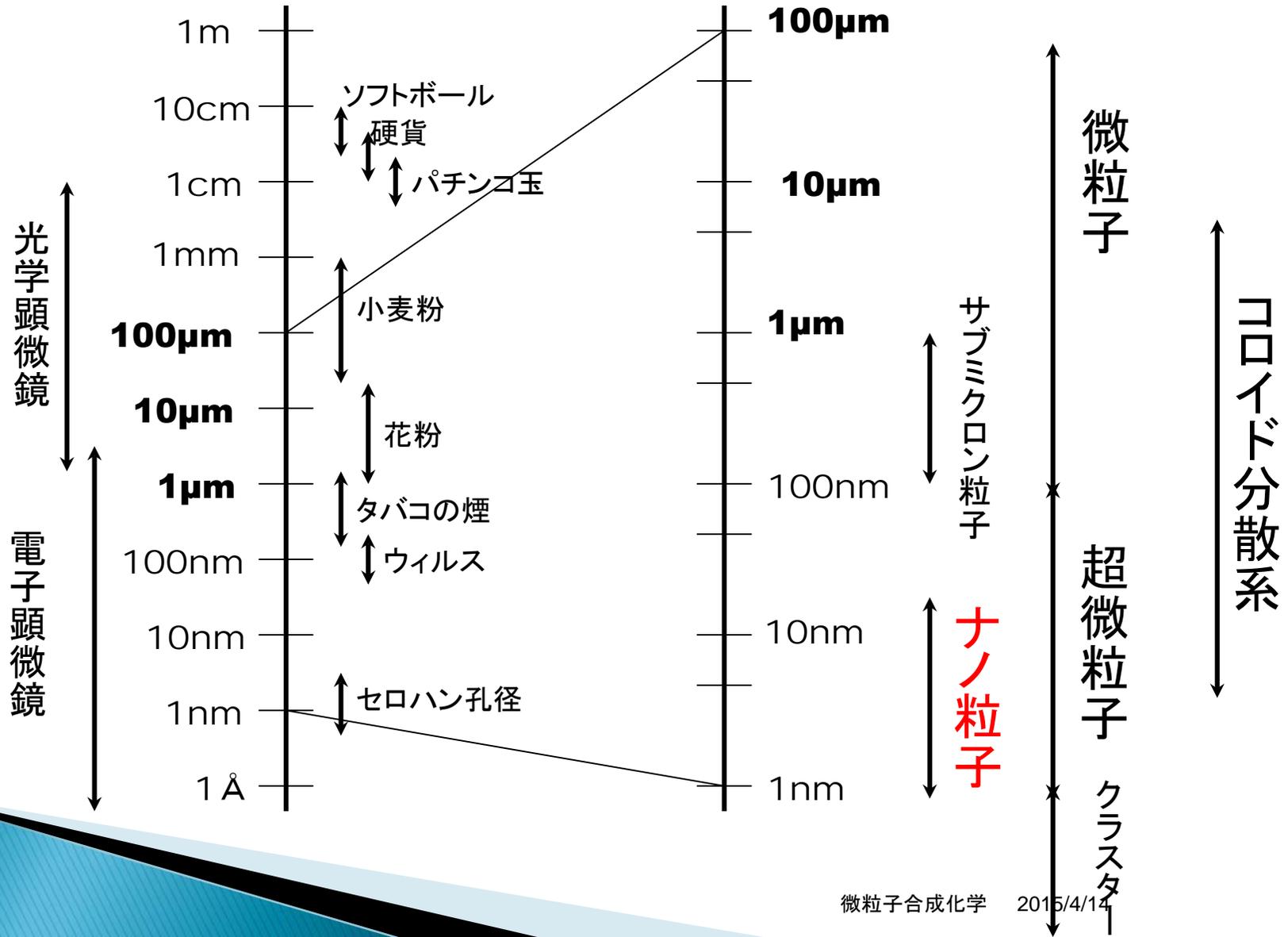
- ▶ 理想溶液と実際の溶液の架け橋として考えられた概念。
- ▶ Activityを訳すときに、活量という名前をつけたが、本当は、活動度とか、活性度みたいな量で、単位は mol/L。
- ▶ 濃度と同じ単位だけど、濃度を補正したものではない。たとえば、1 mol/Lの塩酸のプロトンが100%の活動をすれば、1 mol/Lの活量になるが、実際の溶液ではそうではない。80%の活動をしたとき、0.8 mol/Lの「活量」と呼ぶ。

# コロイド化学への誘い

# コロイドとは何か

- ▶ 理化学辞典にみるコロイド
  - 物質がふつうの光学顕微鏡では認められないが、原子あるいは低分子よりは大きい粒子として分散しているとき、コロイド状態にある、という。
- ▶ コロイド粒子自体は定義が難しく、分散状態にあるときのみを、コロイド状態、と定義できる
- ▶ では、巨大分子が溶けているのと、何が違うのだろうか？

# 粒子径による粒子の分類



# 生活の中のコロイド

2015/4/14

身の周りのコロイドを見てみよう

# 身の回りのコロイド 温泉

# 別府・地獄めぐり 【血の池地獄】



# 別府・地獄めぐり 【血の池地獄】

- ▶ 湧出量： 約1,800kl/日
- ▶ 泉質： 酸性緑礬泉  
= 酸性-Fe(Ⅱ)-硫酸塩泉
- ▶ 泉温： 約78度



赤い色の原因は，第一鉄イオン(Fe(II))が酸化され，加水分解を起こして，固相析出した，水酸化鉄  $\text{Fe}(\text{OH})_3$ あるいは，含水酸化鉄  $\text{FeOOH}$ である．一部は，ヘマタイト  $\text{Fe}_2\text{O}_3$ になっている．数ミクロン～数ミリの粒子であり、分散している．

# 別府・海地獄

